

沖縄大会大会長 挨拶

大会長 宇田 薫（医療法人おもと会 作業療法士）

第12回 日本脳損傷者ケアリング・コミュニティ学会 2023 in 沖縄を、2023年6月24日（土）、25日（日）、沖縄県那覇市にて開催させていただくことになりました。

先に主催者である（社）日本脳損傷者ケアリング・コミュニティ学会についてですが、本法人（理事長 長谷川幹）の目的は「脳損傷の人々並びに市民が同じテーブルにつき、地域において主体的な暮らしの実現及び脳損傷の人々がどのように改善するか等に関して学術研究、知識、技術の向上を目的にすべての人々が双方向に学びあい、その成果を社会に広め、共に生きるコミュニティの発展に寄与すること」



とあります。よって、学会役員だけでなく、全国学会においても、当事者・ご家族と支援者が一緒になって活動や運営をしています。

全国大会はコロナ禍の3年間、中止やオンラインでの開催となりましたが、今回は対面形式での開催となります。オンライン上でも学ぶこと、コミュニケーションがとれると言われるようになった一方、対面でなければ得られない、築くことができないことがあることにも気づくことになりました。長く対面していない仲間と集い、さらなる関係や理解を深めていただくこと、また、初対面の方同士、今後の関係や理解のスタートとしていただくこと。参加していただく方、それぞれの「対面」となることを期待しています。

大会はテーマ「チャレンジ！～成しば何事ん成ゆる～」としました。これは沖縄方言で「一生懸命頑張れば、何事でも成し遂げることができる」という意味で、沖縄民謡「ていんさぐぬ花」の歌詞の一部です。沖縄県では古くからていんさぐ（ホウセンカ）の汁を爪に塗って染めるとマジムン（悪霊）除けの効果があると信じられていたそうです。歌詞の内容は、親や年長者の教えに従うことの重要性を説く教訓歌であり、2012年には県民の圧倒的な支持で県民愛唱歌「うちなあかなさうた」に指定され、今でも県民の誰もが知っている歌となっています。

沖縄はここ数年、働き盛り世代の脳血管障害が非常に増えており、同時に働き盛り世代の高次脳機能障害者も多く、今、まさに県内でのネットワークが必要となっています。本大会をきっかけに、県内の当事者の方、ご家族、支援者の方と一緒に今後の沖縄の高次脳機能障害ネットワークを強化し、また、今後ネットワークを整備されていく地域の参考となるような大会にしたいと考えています。まさに「チャレンジ」です。梅雨明け時期の夏を迎える沖縄で、みなさんと熱いコミュニティを作りたいと思います。うちなーんかい、めんそーれー（沖縄にお越しください）。

日本脳損傷者 ケアリング・コミュニティ学会 2023 OKINAWA

大テーマ
チャレンジ 「成しば何事ん成ゆる」

<p>日時 2023年 6月24日（土）25日（日） 13:00-17:30 09:30-15:00</p> <p>主催 一般社団法人 日本脳損傷者ケアリング・コミュニティ学会</p> <p>参加費 抄録代.....500円</p>	<p>会場 沖縄県総合福祉センター ゆいホール 〒903-0804 沖縄県那覇市首里石嶺町4丁目373-1</p> <p>大会長 大会長 宇田 薫（医療法人おもと会）</p> <p>お問合せ TEL 098-851-0015 E-mail caringcommunity2023@gmail.com</p>
--	--

お申込み
URLまたはQRコードからお申込み下さい

URL
<https://linktr.ee/ccoki>

QRコード

<主なプログラム>

6月24日（土）		6月25日（日）	
13:20	オープニングセレモニー	9:30	活動・研究報告
13:30	開会式	10:40	パネルディスカッション 「旅へのチャレンジ」
14:15	教育講演 鈴木大介氏（文筆家） 『高次脳機能障害・この「圧倒的 不自由」を乗り越える一歩』	13:10	パネルディスカッション 「就労へのチャレンジ」
15:45	当事者パフォーマンス	14:10	シンポジウム「チャレンジ」
16:30	パネルディスカッション		
	懇親会		

脳損傷者の就労と支援

脳損傷者の就労

日本高次脳機能障害友の会理事長 片岡 保憲

1. はじめに

外傷性脳損傷や脳血管障害などにより脳にダメージを受けることで生じる認知障害や行動障害のひとつとして「高次脳機能障害」があります。高次脳機能障害は、「目に見えない障害」と称されるように、身体・精神の特徴が外見からは判断しづらく、復職や新規就労において様々な問題が発生することがあります。また、ご本人が自身の障害を認識すること、つまり、病識を持つことの難しさも就労の難しさに影響しています。

2. 高次脳機能障害のある方の相談窓口について

高次脳機能障害に関する相談窓口として、各都道府県が設置している「高次脳機能障害支援拠点機関」があります（図1）。令和4年4月1日時点で、全国120ヶ所に高次脳機能障害支援拠点機関が設置されており、高次脳機能障害のある方の就労に関する相談のみならず、高次脳機能障害の診断・検査・評価に関する相談、治療・リハビリ・入院・外来通院に関する相談、生活や日中活動に関する相談、復学に関する相談、各種補償制度に関する相談など、高次脳機能障害に関わる様々な困りごとを相談することができます。

高次脳機能障害支援拠点機関への相談後は、状況に応じて、各支援拠点機関の構築している支援ネットワークを活用して、就労を支援する各機関に繋いでいきます。図に示すように、就労を支援する機関にはいくつか種類があり、主に就労に関する相談を受ける機関や、利用者が毎日通って働くためのリズムを整えるための機関、一般の事業所で働くことが困難な場合に、就労の機会と生産活動の場をもつための機関など、それぞれ専門とする領域が異なります（図2）。就労を支援する機関として、①ハローワーク（公共職業安定所）、②地域障害者職業センター、③障害者就業・生活支援センター、④障害者職業能力開発校、⑤就労移行支援事業所・就労継続支援事業所などがあります。

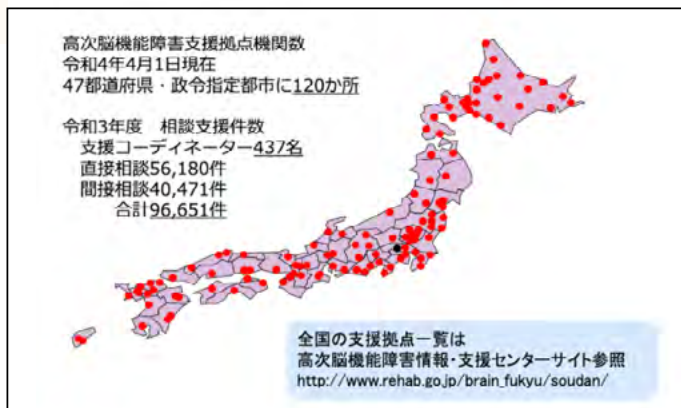


図1：全国の高次脳機能障害支援拠点機関とその整備状況（国立障害者リハビリテーションセンター HP より抜粋）

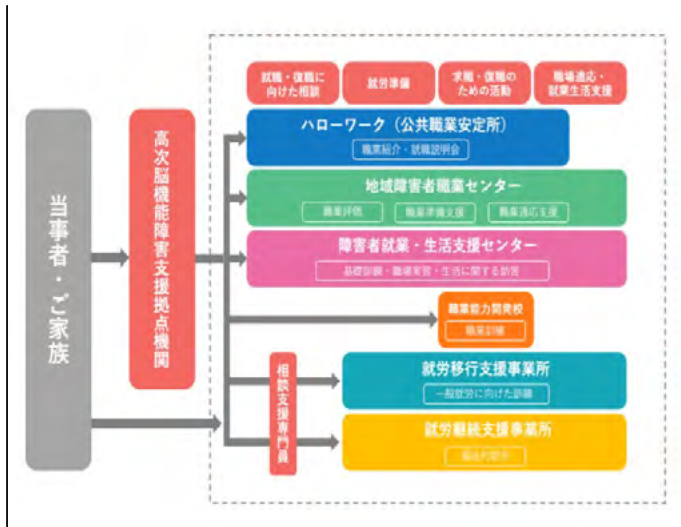


図2：高次脳機能障害のある方の就労を支援する機関

3. 最近の支援事例について

高次脳機能障害のある方の相談から就労までの流れについて、2つの事例を通してご紹介します。

Aさんは交通事故により脳を損傷後、病院での治療やリハビリテーションを経て、日常生活動作自立レベルで自宅に退院されました。退院後は、発症前に勤めていた職場に復職しましたが、集中力が続かない・物忘れが多いなどの問題から職場を退職することになりました。退職後、高次脳機能障害支援拠点機関に相談し、その後、専門機関での評価・検査によって高次脳機能障害（記憶障害・注意障害）と診断されました。ご本人より、「働くために必要な技能やコミュニケーションの能力を身につけたい」「高次脳機能障害に対する対応方法を学びたい」との要望があったため、相談支援事業所へ相談後、就労継続支援B型事業所の利用を開始されました。就労継続支援B型事業所では、記憶障害の影響により作業内容や職員や他の利用者の名前が覚えられないなどの問題があったため、記憶障害を代償する手段として「メモリーノート」の活用方法を学びました。就労継続支援B型事業所の利用開始と同時に、障害者職業センターへ再就職に向けた相談を継続して行い、障害者職業センターの紹介によって国立職業リハビリテーションセンターへの入所が決定し、現在も再就職に向け専門的な指導を受けながら職業訓練に取り組まれています。

Bさんは脳出血を発症後、高次脳機能障害（注意障害）と診断されました。退院後は職場復帰を目標に、障害福祉サービスのひとつである機能訓練を通所にて利用され、同時に、相談支援専門員と連携をしながら職場とのやり取りを継続して行い、発症前に勤めていた職場に障害者雇用枠で復職をされました。しかし、Bさん自身に障害の自覚がないこと、更には職場の現場スタッフの高次脳機能障害に対する理解も十分ではなかったことから、職場内での人間関係に問題が生じ、部署異動をすることとなりました。このように、発症前に勤めていた職場に職場復帰ができたとしても、病識の欠如から生じる問題や職場内での障害に対する理解不足などの問題により、就労の継続に苦慮する事例は多く存在します。

4. おわりに

高次脳機能障害のある方において、ご本人が早く就職や復職をしたいと望んでも、就労に適した状態まで必ずしも回復していない場合があります。しかし、それぞれの状況に応じて長期的な観点で安心して働くために、相談、準備、就職活動、復職、職場定着など、場面に応じた支援サービスを利用することができます。高次脳機能障害のある方で就労に関してお困りの場合、まずは、お住まいの地域の高次脳機能障害支援拠点機関にご相談いただくと良いと思います。

就労を経て思うこと

【一つの会社で10年以上働いて】

みずほ若い失語症者のつとめ 藤井健司（愛知）

2004年4月 大学4年時に交通事故で受傷。約2年後退院し、復学。1年後卒業し、就職訓練を受け、2008年就職。今の企業には、病院のジョブコーチに調べていただき、私の状態において障がい者就職面接をして就職出来、就労当初はジョブコーチが半年程いました。依頼された作業をどのようにすべきか、どうしたら良いかの質問に返答してくれて社内でもどのように質問するかを知りました。年数が立つと様々な指示を上司から受け、その事には批判せずに従い行動しましたが、全てを記憶出来ませんので再度教えてもらう事が多々ありました。その事を抑えるために、用件をメモに記入して、何度も見て、忘れないように携帯に記入しました。二年後にPC扱い事務から緑地作業に異動になりました。作業内容が変わりましたが、メモを忘れないようにして徐々に分かりやすくなりました。

就労後も一般的に必要なのは「挨拶」です。全く返答しない方もいますが、その時の気分や状態により出来ない方もいます。私は相手に私の存在を認識してもらい、お互いに親しみやすさを感じられ、名前も覚えられるようになります。その事により雑談が進み、仕事上の相談や質問が出来るようになりました。まれに上司、先輩に車に乗せていただき、雑談して駅や自宅まで送って頂きました。時々、他の社員に無視されることがありますが、その事を深く考えません。深く考えると、機嫌悪い表情になり、他人の見え方も悪くなります。高次脳機能障害がありますので、良いことよりも辛いことは睡眠により忘れ、翌日は普段通りスッキリ働いています。

私の就労についての意見としましては、その道に進めたら、継続していくように社員、家族、友人、医者等に疑問・質問を相談して解決方法を見つけると先に進めると思います。

【企業※の就労支援を受けて復職】

K.T.さん（3年前、46歳で脳梗塞を発症。右半身に中等度の麻痺）

病気をしてから、仕事を退職しリハビリに専念していましたが、少しずつ改善してきたので、また仕事をしたいと思うようになりました。リハビリの先生に相談したところ、紹介されてワイズキャリアに登録しました。病前にやっていた営業のマネジメント業務に近い仕事に戻りたいけれど、後遺症のことを考えると難しいだろうと思っていました。ワイズキャリアは、理学療法士の方が後遺症のことを沢山ヒアリングしてくれて、元の業種や業務に近い会社を探し、身体状況や今の私にできる業務を企業側に説明・提案してくれました。縁あって2023年1月から、在宅と通勤のハイブリッドワークで営業の管理サポート業務をはじめることができました。営業先へ行くことも一部ある業務なので、移動も伴います。そのことで、家族には大変心配されました。私自身は、事前に、移動に時間がかかることや、リュックなどを使用することについても話して了承を得られていたので、不安があまりなかったです。家族も、私が楽しそうにしている姿をみて徐々に納得してくれているようです。障害があるからとあきらめず、まずは力になってくれる人を探し、自分の障害のことを自分・会社・家族にしっかり共有していくことが大切だと感じています。

※『脳梗塞リハビリセンター』を運営するワイズが始めた、障害者手帳をお持ちの方への就職・転職支援サービスワイズキャリア（<https://ys-j.co.jp/career.html>）。理学療法士らのサポートが特徴。

「脳障害になった時にあるとよい知識 Part4」研修会報告

当事者社会参加推進委員会委員長 長谷川幸子

当事者社会参加推進委員会は、障害者・家族や障害者を支援してきた専門職で構成され、構成メンバーは、委員長をいれ9名です。当事者社会参加推進委員会の活動目的は、障害者・健常者に関わらず、互いに連携し、障害者の社会参加を推進することで、年間の活動の一つとして、脳卒中者や家族の気持ちを発表する研修会「脳障害にあった時にあるとよい知識 Part4」をメインテーマとし、サブテーマ：2022年は「就労」を登壇者5名で、2022年10月1日研修会を開催し、そのアンケート調査の結果の一部をご報告します。

【結果】ZOOMを利用した研修会で、参加者54名中アンケート回答率61%と半数以上の回答があり、研修内容に対して、「物足りない」はならず「大変参考になった」や「参考になった」の回答であった。

(1)「大変参考になった」や「参考になった」の理由

①当事者主体の研修会で勇気と元気を頂いた。②5名の登壇者の「就労」の企画で、高次脳機能障害者就労や、就職までの道のりを学んだ

③当事者様、御家族様、同僚の方、リハビリ専門のドクターとそれぞれの立場からのお話で、日頃の生活の中で気づかない視点を知った。④相当の努力での結果とは思いますが、諦めずにチャレンジすること、社会との繋がりをつくること、ご縁を大切にすること、本当に大切なんだと改めて気づき、希望が持てた。⑤その人それぞれ個性のある転機や支援と主体的な取り組みへの移り変わりの実例を学べた⑥登壇者それぞれが貴重な体験談で、具体的に分かりやすく登壇者のパワーが伝わった。⑦人生は、障害像やその程度で決まるのではなく、当事者の思いが重要になる。ただ、登壇者の体験は素晴らしいものであるが、その様な体験を持っている人が立派で、そうでない人が立派ではないという決論付けは良くない。様々な人の力も借りながら、支援を活用しながら進めていくことが重要である。

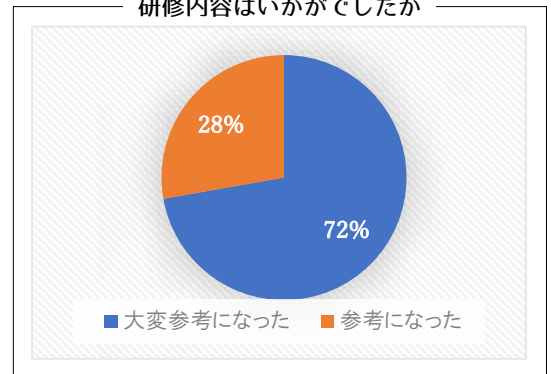
(2) 登壇者（障害当事者）に対する反応：①人それぞれに違うが、大変クリアに発症前後に通られた道筋をご自分の声で語り、当事者から直接聞けたことで、迫力があり他人事と思えなかった。②ご登壇の当事者様お二人とも、「自分に出来ることは何か」常に考えて、ゆっくりとでも行動に移している姿が勉強になった。③障害があっても、仕事をとおして、社会参加する、意気込み、すごい。

(3) 障害当事者からのご意見：①自分は働きたいが、行動に移すのが怖い。お話を聴いて勇気をおこす助けになった②同じ病いに倒れた当事者の就労復帰までのご苦労をお聞きし参考になった。③情報収集すれば身近にも復職を援助する公共機関や団体などいくつもある事が分かり安心した。今は脳出血発症前の会社にパートで復職しているが状況が変わる事も想定し情報収集したい④手伝ってもらいたい事を本人がわからないと就労は難しいと分かった。

(4) 障害当事者のご家族の反応：お二人のお話は大変力になった。うちは先生が言われていた若年性に入る年齢、福祉にお世話になるくらい？一般進学、就労は厳しい？一番困っている年齢層で、年齢、状態は違えど、ご当人のパワーが伝わった。

(5) 支援者として：①実体験から、その時々感情が知れて、支援者として、どう寄り添ったら良いかのヒントが得られた。②改めて大変だったことを聞いて、これから自分にできることを考えることができた③実際に社会復帰された当事者の方の過程をきく機会となった。

研修内容はいかがでしたか



編集後記

脳損傷者ケアリング・コミュニティ学会には、2016年の東京大会実行委員として関わり始めました。当時、所属や拠点、立場もばらばらな会員の皆さんが、集い、情報交換して、新たな活動に繋げていく様から学ぶことが多く、その後、広報委員に加えていただき今に至ります。常々「情報を届ける＝選択肢を広げる」ことだと思っています。私の所属先の事業である「脳梗塞リハビリセンター」のご利用者様からも、「知っていて選ばないと、知らないのとは全然違う」という声を頂いています。今回の特集「就労」という局面においても、本人・企業・ご家族が障害について情報を共有し、共通理解をもつことが継続のための重要ファクターといえそうです。今後「けあ・こみニュース」で取り上げてほしいテーマのリクエストなどもぜひお知らせください。引き続き、会員の皆さんに有益な情報を届けて参りたいと思います。

- 井堂 愛子 -